

現代思想の冒険者たち 第21巻

鈴木和成著 『バルト テクストの快楽』 講談社刊

最初にバルトの研究者でもないものが、このような一文を書くことについて幾ばくかの説明をさせていたが、

十九世紀末から今世紀にかけて、現代思想と呼ばれる様々な思想が生き死にを繰り返してきた。そこで共通していることは、われわれの時代が「言語」と「セクシュアリティ」を見出した、ということであろう。バルトに即して言う、「言語の物質性」と「女性性」(フェミニテ)となる。一般にバルトという人はフットワークのかるい思想家とみられている。「恋愛のディスクール」、『ミシュレ』をはじめ彼の扱ったファッション、ストリップ、プロレス、ホモセクシャル、ハシツシなど、さらには白いエクリチュール、ニュートラル、テクストの快楽とつたバルト語にしても「言語」と「セクシュアリティ」に関係しないものはないし、これらの題材がいまなお現代社会を語る上でもっとも現代性の刻印を帯びたものであることに変わりはない。しかし、問題はこれからで、こうした題材自体もすでに現在ではサブ・カルチャー、カウンター・カルチャーとして社会の一定の承認をうけてしまい、逆に知的な分野、哲学や文学もこうした題材を扱わなくてはならないというドクサさえ形成されつつあることである。

一方、現代社会にあつて切実なものひとつに芸術があることは疑いえないことであろう。私にとつても芸術、とりわけ文学が、社会に出るにしがたつていつそう大切なものになつてきた。私が本書を手にとつた理由は、いまの芸術、文学を取り巻く状況を考える上でバルトに立ち返つて考える必要があることである。上記のようなサブ・カルチャー的な題材は、バルトにとつては「おろかしさ、この愛すべきもの」であるが、こうした題材がいかなる存在としてバルトの生涯に機能したのかを見極めたかつたのである。

そして、もうひとつの理由は著者の鈴木氏が詩人であることであつた。鈴木氏は、ランボーについて傑出した書物を著されているフランス文学の研究者であると同時に、自ら詩人として詩的言語を扱う仕事に従事されている。もとより現代詩は十九世紀後半からモダニズムという現実を背景として歩み始めた。しかし、詩人として著者がバルトを論じることのなかなには、二十世紀も残すところあと数年となつて現代詩を生みだした現実がリアリティを失いつつあるとき、現代詩とりわけ日本の戦後詩とは、いったい何であつたのか、これからどうなるのか、終わつてしまふのか、といった詩人自らの態度決定が内蔵されているのではないか。今日の情況の中で著者自身あえて詩を書くことは確固とした姿勢と相当な決意が必要であろう。そうした意味で、本書において詩人としての著者がバルトの読みを通して、現在ますます狭い範囲に困り込まれつつある詩の世界への思索を読みとれるのではないか

との期待があったのである。

常々感じることなのだが、現在われわれが生きている中でもっとも苛立たしく、歯がゆいことは、あらゆる言説のいかがわしき、白々しき、時として発揚される暴力性である。政治家や経済人をはじめ新聞、テレビなどのマスコミ、果ては知識人に至るまですべての言説が相も変わらず言説＝ロゴスのもつ権力の呪縛に囚われている。情報化社会あるいはボードリヤールの言に従えば後期資本主義の跋扈する世界ではあらゆる言説、批判さえも、商品化され消費されてしまっている。

「ロラン・バルトの時代というものがある」と著者が書き出すとき、およそ一九五〇年代なかばから没年の一九八〇年までの約二十五年間、さらには二十一世紀を目前にした現在までに、記号論、構造主義、精神分析、文化人類学、言語学のさまざまな活動が本来孕んでいたダイナミックな可能性、創造性、破壊性をことごとくものわかりのよい議論に通俗化されてしまったことへの著者の静かな憤りを感じることは深読みに過ぎるだろうか。著者がバルトを「啓蒙の人」と呼び、「難解にしか語りえない明快な思想がある」と宣言するとき、かつてポストモダンという言葉がジャーナリストやテクニクに世間を席巻し、構造主義にしても正確に理解される以前に、いとも簡単に矮小化され、あっさりと葬り去られたことへの不機嫌ないらだちが本書の底流を流れているように感じられるのである。

さて、われわれは依然として一つの知の体系として了解できうるような世界に安住することを期待している。二元論の迷妄からの自由を求め考え抜かれた近代思想がもたらした二項対立の抗争と止揚を内に含んだ、したがってその分だけ複雑な構造を内包した一元論、あるいは形而上学を頼りにしている。そして、この一元論の世界は隠蔽され抑圧されたものを排除したところで成り立つものであることを、われわれの時代が、少なくとも記号論、構造主義以来の知的営為が明らかにしてきたところにも係わらずである。いや、これらの知的営為が、伝統的な確固とした世界観、大きな物語を解体し崩壊させてきただけに、その後の思想的停滞が宙ぶらりの状況をつくりだし、その情況に耐えかねるように、いつそうの苛立たしき所在なさを助長している。これが曖昧で形容しがたい現代の姿である。

それだけではない。われわれは、われわれ自らの言説にも常に裏切られ続けている。本当のことを言えない、常に本当のことが言えていないという実感がつきまとっている。ここには、かけがえのない私、他人と交換できない自分への目覚めの契機がある。

われわれにとつての真実は、客観化する近代理性がつくりあげる歴史的、社会的な人間像に還元しつくすことのできない自己固有の私なのである。十九世紀以来の近代＝モダンの成立と変容によって社会から常にすり抜けていく自分との矛盾に直面することから、現代思想といわれるものが始まった。ヘーゲルを引き合いに出せば、弁証法の自己展開の発露としての矛盾などというのは

空想に過ぎず、むしろ、近代理性の働きがわれわれ自身と世界を客観化していくさ中に近代におけるわれわれの抱え込んだ本質的な矛盾がはじめて意識されるのである。そこにこそ（近代の）芸術、文学の立脚点があるのである。

「今日、私たちは何者かであると規定されることに居心地の悪さを感じている。私は哲学者である、作家である、詩人である、学生である。そのように言いきるためには自分を偽らなくてはならない。借り物の衣装を着ているような気がする。この自分というものの形容しがたさ、何者かであることの居心地の悪さ、定めなさ、漂流ということ——これらの現代性の印は、まぎれもなく半世紀ほど前にロラン・バルトが私たちに手渡そうとした大事な指標」であったとすれば、バルトの仕事の意味が彼の死とともに終わったわけではないし、われわれは今もなおバルトの時代を生きているという著者とともに、われわれにとつてもバルトを読むことは「現代思想の冒険」への旅立ちの第一歩となるであろう。

とはいえロラン・バルトについて語ることは難しい。そもそもバルトは定義しがたい人物である。彼の著作にしても「あらゆる本に似ている結果、どんな本にも似ていない」ような形容しがたいものである。「前後の脈絡でしか存在しない本。システムの盲点。残余、痕跡、余計なもの」であつて、バルト語で言うなら「零記号」のようなものである。したがつて、彼は「いかなる意味でも自分に貼られた記号に安住する人ではなかつた。彼は「しかじかの存在である」という存在規定によつては捕らえきれない人であつた。彼がもつとも嫌悪したのは「もつともらしさ」が生み出す神話作用だつた。本当らしさ、自然らしさ、当然であること、これが彼の嫌うものだつた。彼はこれをプチ・ブルジョワの神話と呼び、世論（ドクサ）と名づけて、その松脂のようにねばねばと貼りつく粘着性の作用にたいして逃走の線を引こうとした」のであつて、彼を思想家、哲学者、文芸評論家、批評家、あるいは記号論者と呼んでみたところで何も言ったことにならない。むしろ彼と彼の書いた本が、現代の知の成果である記号論、構造主義、精神分析、文化人類学など様々な分野の本を、あるいはフーコー、デリダ、ドゥルーズ、レヴィニストロース、ラカン、クリステヴァなど現代思想家と呼ばれる人々を、現代思想というひとつのジャンルに繋ぎとめている、その力に目を向けるべきである。彼の書いた「書物がロラン・バルトの体系、現代思想という体系を支えている」のである。それを著者は零記号の力と呼び、この「零記号が漂流を開始して体系をおおう」光景、「体系を覆す運動」、それをわれわれは現代思想と呼んでいるにすぎないと言う。

そこで、著者は一九五三年の『零度のエクリチュール』から一九八〇年の『明るい部屋』まで、バルトの思想経歴に大きな転回があつたという定説を採らない。転回といえばたえざる転回の軌跡をたどつたバルトを描くために著者の採用した方法は共時的な方法と通時的な方法の併用である。前者は、まさにこの点に本書の要点があるのだが、彼の「思想的変遷、その歴史を、いわば写真に撮るように一時に、同時に観察し分析する方法」である。なぜなら、「彼の思想の運動それ自体が共時的な運動を引き起こして

いて、あの断章形式に端的に表われているように、すべてを同時に並列して見せる、という「写真的エクリチュール」が採用されているのであって、このエクリチュールの同時進行性、あるいは共時性こそが彼の思考の核心であるのである。この「エクリチュールの力」をめぐって著者のバルト精読の成果が展開されることになる。

本書において「バルト自身、思想が一種のモードであることを見抜いた最初の人」であったという著者の意図は明らかである。記号論、構造主義などのいわば思想の意匠、「アルルカンの衣装をまとった思考」の達人、「ジョーカー」としてのバルトの一貫性、「螺旋状のアイデンティティ」への著者自身の接近方法を各章にわたって繰り返し繰り返しわれわれに開示することに尽きる。そこで著者は「作者バルトの立場に立とうとしてはいけない。読者の一人一人の立場」に立ってバルトに接近する。著者にとってバルトの大きな足跡を語ることに、あるいは彼の著作一冊一冊について解説めいたことを書くことはさほど困難なことではない。語ることに、書くこと、それを対象化、概念化といってもよいが、それによって必ず取り逃がしてしまうものがあることが問題なのである。それを記号化不能なものといってもよい。著者はバルトのテキストの結論が常に開かれており、そこにバルトの批評の「キモの部分」を見出している。そこには、「論旨が不透明になり、角がとれ、滲んだようになって、やわらかな空白」が残っている。しかし、この「空白」を読み解くことと解釈することは何らバルトを語ることにならない。このバルトのテキストの最後に浮かび上がる「空白」こそがわれわれにとつての出発点なのである。

バルトは「テキストの最後の段落で読者を、あなたを指すのだ。そこに作者の退場する出口があり、読者の登場する入口がある。一人の作者から多数の読者への、この変身劇。バルトの批評の最大の魅惑とは、この作者と読者のテキストという舞台における交代劇」にあるのであり、そこから始めることの中にしかバルトの真実は見えてこないというのが本書の立場である。もしバルトの遺産といったようなものがあるとすれば、それはバルトの思想を総括することではなく、その確かなテキスト理論であった。それは、これしか選択できないという意味で、むしろこちらが選ぶというよりも、どこから不可避的にやってくるものとしての彼の一貫したテキストへの態度であった。

ところで、本書は「現代思想の冒険者たち」と題したシリーズの一巻である。本シリーズは、今村仁司、三島憲一、野家啓一、驚田清一、四氏の編者により選ばれた三十人の現代思想家と呼ばれる人物を一人一冊で扱ったものがあるが、この三十人の中には、驚くべきことというか、これが編者の企図のなによりの表明でもあるのだらうが、サルトルが入っていない。恐らく、六〇年代であれば当然入っていたであろう実存主義とマルクス主義の人たちが抜けているのである。かろうじて実存主義ではハイデガー、マルクス主義ではルカーチ、アルチュセールぐらい、その代わりにジンメル、ホワイトヘッド、ワイトゲンシュタイン、ガダマー

などがとられており、フリーコー、デリダ、ドゥルーズ、レヴィナス、哲学畑以外でレヴィーストロース、ラカン、バシュユール、ベンヤミン、バフチン、エーコ、クリステヴァなどの顔ぶれが並んでいる。現在の日本において現代思想というものを考えるとき、サルトルが落ちてバルトが入っているという本シリーズのような企画が大手出版社において成立するという事実は、時代の趨勢といつてしまえばそれまでだが、やはり一考に値することではなからうか。

そこで重要なことは、バルトが『零度のエクリチュール』で登場したとき、彼が「実存」にかえて「エクリチュール」と言うことによって何が始まったかである。一九五五年、カミュとの論争を経て「時代は確実に、実存からテクストへ、歴史から構造へ、意味から記号へと流れを変えた」。その時から知的バックグラウンドが変わり、思想の道具としての言葉が変わり、文体も変わった、その目覚めの光景をバルトとともに見届けることは、われわれにとつてもスリリングな経験である。

周知の通りサルトルの『文学とは何か』以前に「文学」自体が問われたことはなかった。サルトルの「政治参加とは、文学という自明の制度を暴露する行動であった。詩も小説も文芸評論も、それらもろもろの文学と称せられる営みは、いまだかつて文学それ自身をふり返つたことはなかった」のである。バルトの『零度のエクリチュール』もサルトルの問いの地点から発している。バルトにとつて「もつとも深切に愛されたおろかなもの、見えないものは「文学」だったのであり、彼の批評は挙げてこの盲目の文学を（プレヒト流にいうなら）異化し、対象化し、差異のもとに見ることに賭けられて」いたのである。愛するとは、まさにそれと共に断固として生きる決意をしたことを意味する。しかし、職人には職人の世界のしきたりがあるように、文学にも文学のしきたりがある。そこで、バルトは、「文学を考えるにあたって、文学の外に出ようとした。文学の外部、それがバルトにとつて言語だった」のである。著者はここにサルトルの「文学とは何か」という問いの徹底を見ている。バルトが「サルトルから別れるのは、文学からさらに言葉を切り離し、それを言語の身体として対象化した」ことであつた。文学を「私」や「実存」によって問うことはできない。「文学」の他者とは「私」ではない、言語である。「ロラン・バルトによるロラン・バルト」、『明るい部屋』などの自伝的な著作の「私」でさえ、すでにバルトにとつては「文学」の登場人物、文学内部の存在であつたのである。

ともあれ「マルクス主義的、科学的、客観的「解釈」という頑固な〈制度〉に対して、バルトもまた、「搦め手」から攻める必要があつた」（竹田青嗣『世界という背理』）としてもバルトの進み行きは、フロベールが『ボヴァリー夫人』を書いた時代からバルトを経て、おそらくは現在まで妥当するであろう。その意味で「バルト以前に、一般に芸術の一分野として聖域に安置されていた「文学」を、たんにこれが言葉の身体であると断じた文学者、批評家はいなかった」のであり、バルトは文字通り文学を「裸にしてみせた」のである。

テリー・イーグルトンは、その名著『文学とは何か』においてすでにフェミニズム批評に大きな期待をおいている。フリーコーシカリ、デリダの「差延」「散種」などの概念がセクシャルなものであることはいうまでもない。いわゆる現代思想と呼ばれるものでロゴス中心主義、男根中心主義への批判を含んでいないものはないであろう。バルトにおいても、たとえばファツション・デザインナーのデッサンを論じた『エルテあるいは文字どおりに』での「女を捜せ」という命題の探索として費やされる。ここでは「精神主義に傾くロゴス中心的なものの考え方にたいして、エクリチュール、具体的には手書き文字、たとえば東洋の書のもつ物質性、その女性的な身体性が称揚された」のである。

本書におけるひとつの特徴に『ロラン・バルトによるロラン・バルト』、『明るい部屋』などの自伝的著作だけでなく、『零度のエクリチュール』と共にもうひとつの処女作『ミシユレ』への重視がある。ここでは「社会的神話批判の時代から記号学、テキスト性をへて、モラリテの時代へ、ロラン・バルトの軌跡は循環する回帰の運動を示しつつ螺旋状に歩みを進める。(中略)彼はそうした循環する歴史の時間というものを女の周期的な時間性に見出した」のだが、バルトの視線は、男性のものである歴史の直線的性格(通時性)にたいして女性のものである自然の循環的な時間、継起する「生きた不動性」(共時性)が対比され、これらが交差するところに生まれる新たな歴史、過程としての歴史、双方の出会いから溢れ出るもの(シミュラクル)を考察することに注がれている。バルトにとってなによりのは、男性に属する一般の歴史のように、たえず流動し変化するもの、したがって「見えなものの」を、いったん女性の領分に属する静態的な状態にすること、すなわち「見えるもの」「知覚しうるもの」にすることであった。その意味で「記号」とはその科学的装いをとりさつてみれば「女」であったのである。ここでは「言語が事実をなぞり、それを模写する写実的な言語であることをやめて、記号論的というなら「シニフィアンの過剰」をひきうける」のである。著者が『ミシユレ』においてすでに構造主義あるいは記号論の思想が先取りされ内在していたことの重要性を指摘してみせたとき、われわれも著者とともにバルトの「批評が一貫して愛するものを「見る」という行為にかかわる問題、そこでゆらぐ主体とは何か?この問題に尽くされる」ということが了解されるのである。

「この二十世紀後半の思想界、文学界を領導した人は、構造主義、記号論、言語理論、精神分析、テキスト理論等々、そのときどきの思潮を先取りするようにして「理論武装」してゆくように見受けられる。しかしバルトをバルトたらしめる本質的な動機、「バルトによるバルト」という自己回帰的な今まで論じられてきたように、この回帰は強度の回帰、差異の回帰であって、たんに自己自身に返ることではない―運動のなかに聴きとられる「血液のリズム」の女性的な弱さの動機が、彼を武装解除し、「彼自身あるがままの」(マラルメ)主体へと送りかえしてゆく点にこそ、彼のテキストの現代性、その最大の悦楽がある」のである。作品からテキストへ、そして作者の死を宣告した本家としての「テキストの快楽」の真意があるのである。

すぐれた入門書とは、すくなくとも対象となった思想家などの著作、原典を読んでみる気にさせるものであろう。本書をすぐれたバルトの入門書たらしめているのは著者が「バルトを論じてバルトのように語ることは愚は避けなくてはならない。なぜなら彼が私たちに与える最大のメッセージとは、愛するものと一体化したとき愛するものは見えなくなる―すなわち対象の差異化の運動は止み、同時に知は終わる、そんなおろかな類推的な推論はやめよ、という」接近方法にあるのであろう。バルトにとって重要な概念である「距離」(ブレヒトの意味で)、読者(著者)と思想家(バルト)との絶妙な間合いの取り方であろう。その意味で本書もバルトと同様、結論部が開かれている。「『明るい部屋』によって記号論、構造主義はひるがえって読みかえされ、そこに新しい生命をおしたのだった。そのような読みかえしが今、要請されている」のであり、われわれもバルトの思想圏の住人としてバルトの世界に分け入っていく楽しみを享受することができるのである。

福家俊彦(昭和五二年度卒業、現三井寺執事)